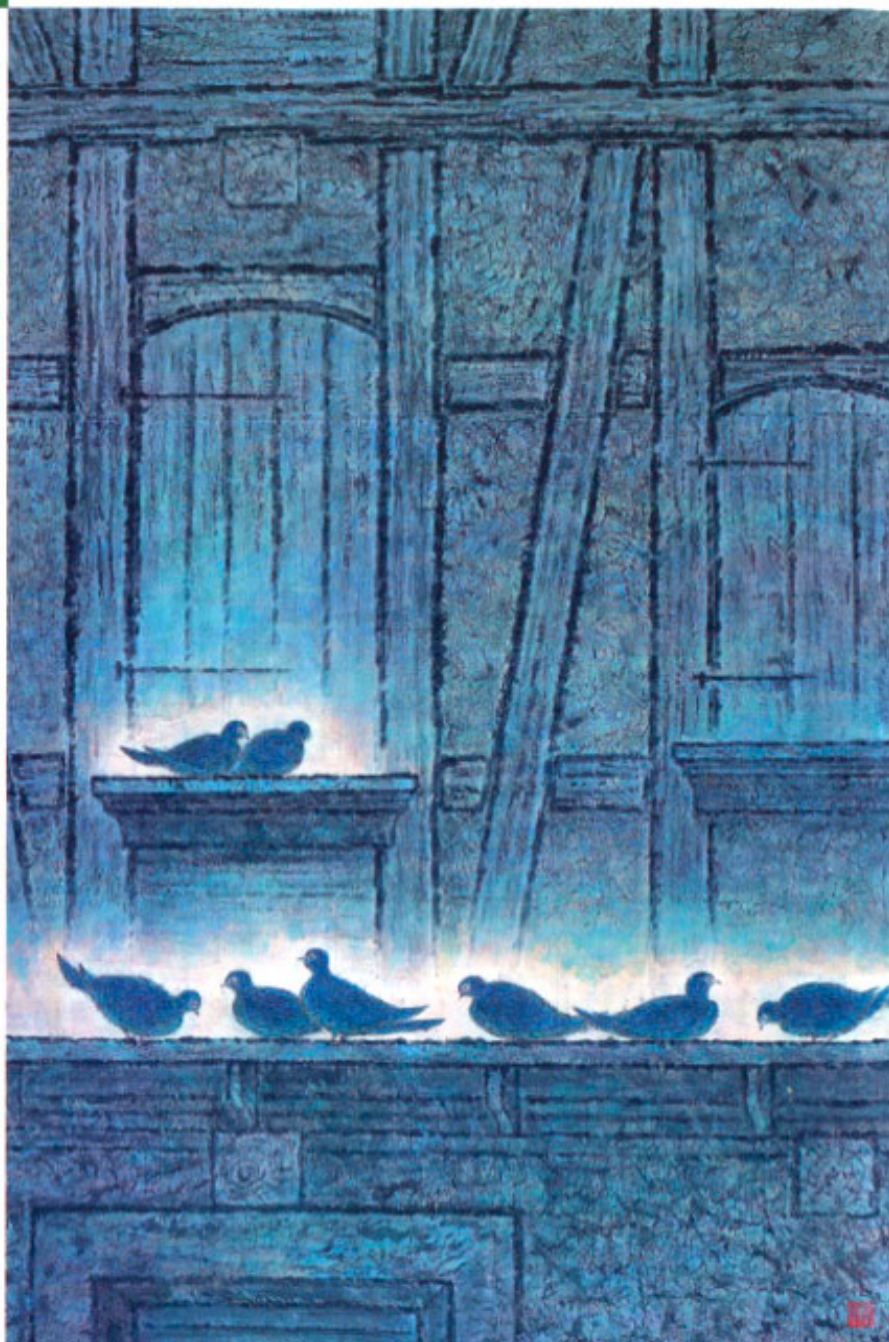


沖

9
2015

俳句雑誌[おと]



神

杉

能村 研三

外房の家

妻の母は今も健在で埼玉の老人ホームに入っているため、外房の太東にある家が空き家になっていた。海からは二キロほど奥に入ったところだが、周りには稲がたわわに実る田んぼと梨畑があるなど、環境も良く田舎暮らしが満喫できる所なので、時間が取れる時は、気分転換も兼ねてここに来て原稿執筆や選句などの仕事をするにしている。海風の影響なのか市川より平均気温も四度位低く快適である。朝は老鶯の声で目が覚め、夜は田んぼから蛙の声も聞こえてきて、都会では見られない星差が輝く。いつも何かに追われているようだが、ここに来ると開放されて気分が落ち着く。市川からは九十キロほどは離れているもの的高速道路を使うと一時間半くらいで着く。

大原の内山照久さんや大網白里の小河原清江さんなどが近くにおられ

籐椅子に降りみ降らずみ籠りをり

打水の上懇ろに歩くなり

横浜吟行二句

南風ぐもり開く聖書碑墓標とす

翠蔭にイギリス館の銅ポスト

千言を研ぐ若竹の勢ひかな

青田風沃野千里の三代目

高山・中部大会四句

夕青嶺湖底に透ける御母衣村

円空の祈り涼しき木目襪

円空の生成り簡素や飛驒晩夏

神杉の五本一魂涼しけれ

る。九十九里の南の突端太東岬には太東燈台があり、夜になると闇夜に灯りをともしてくれる。

近くには、浮世絵師として有名な葛飾北斎の作品に描かれた波に大きな影響を与え、波を彫つては天下一と言われた「波の伊八」が残した欄間彫刻のある飯綱寺や、

木枯らしに岩吹き尖る杉間かなと詠んだ芭蕉句碑のある坂東三十二番札所の清水寺などの名刹もある。

一ノ宮には芥川龍之介のゆかりの宿として知られる一宮館などもある。先日は孫たちもここに泊まったので、近くの本東の海水浴場でも遊んだ。何十年ぶりに泳ぐことになったが、ボディボードで荒波に身体を打ち寄せられるのを楽しんだ。

太東の家には、離れがあり、小さな句会も出来るスペースがあるので、季節の良いときには俳句の有志と近くを吟行して句会をやってみたいと思つている。

蒼茫集



食合せ

成宮紀代子

手折りたる草の乳噴く半夏生
知らぬ間に駅名変り夏蓬
七夕や父の紙縊のぴんと立ち
お隣とわが家を結ぶ蜘蛛の糸
自転車でどこまでだつて行けた朱夏
土用鰻死語となりたる食合せ

レーザー光線

細川洋子

藤枕天井少し高くなる
怒りても栓無きことや籐寝椅子

レーザー光線あやなす夜景夏料理
大吊橋渡るハンカチごはごはす
向き合へる父と児抱つこ紐涼し
用水の疾き流れ追ふ夏休

修羅

秋葉雅治

万緑の中や濡れ葉のいろ濃かり
父の日や男にシャイといふ美学
生き生きと微動だにせず梅雨鯨
神官の背より晴れ初め山開
人と鵜のひとつきの修羅火が照らす
鵜松明消えて波音よみがへる

鉄の匂ひ 宮内とし子

梅雨明くる鉄の匂ひの道具箱
甘きもの一口欲しき麦の秋
屑金魚より蘭鑄に深入りす
夏館大樹は歴史語りけり
草鉄砲ぽんと文明開化の地
蘇鉄咲く島正面は太平洋

遮断機 松井志津子

抱へなほす西瓜遮断機上りけり
噴水のパターン覚えし待ち合はせ
逸材と言はれし日あり長昼寝
かき氷同じ訛の夫と居て
定位置に帰船の並ぶ土用あい
富士見ゆる筈と指さす海霧の奥

朝顔の数 高橋あさの

朝顔の数に会ひたく繰る雨戸
通り抜け叶はぬ路地の濃あぢさゝ

細雨の真鯉ひらりと涼気かな
触るものみな雫して梅雨の蝶
老鶯やリフトにしかと掴まりて
一糸乱れぬ炎天の杉襖

フーコーの振子 上谷昌憲

フーコーの振子が垂るる梅雨の底
一卓一燭青梅雨のカフェテラス
老鶯や有珠山煙吐き止まず
富良野よく霽れて馬鈴薯花ざかり
万緑や雲を放さぬ十勝岳
噴水の抜き身すんと納めたる

厄年 安居正浩

指先の感じてみたる泉かな
厄年に上限のありところてん
籐椅子に体が波になつてゆく
父の日の少し寄り道して帰る
声変はりして初めての夏休
螢火は黄泉への誘ひ戻らねば

妖かし刻

千田百里

魁夷の道辿れば美しき夏のあり
學歷を問はざる詩界涼しかり
ビヤガーデン星の名当てに盛り上り
遠目にもがやがや咲いて棕櫚の花
ネックレスざらりど置いて巴里祭
妖かしの刻来て烏瓜の花

鳥あまた

辻美奈子

バスを待つとき夏休み待つ心地
蔵ひとつ残して毀ち花うばら
鳥あまた飼ふ賑はひや星祭
浴衣よう似合うて古嵐ともちがふ
おとなとはこんなさびし水鉄砲
あぶら照うつとり光る猫目石

西日

森岡正作

突然の客に西日のついて来る
塩辛の一膳で足る半夏生
紫陽花の湖近ければ湖の色
林間学校みな風の子となりゆけり
藍深き湖へ消えゆく梅雨の蝶
青梅雨にボトルシップを解き放つ

直線に

菅谷たけし

南風沖にうごかぬ油槽船
みなどみらい直線に飛ぶ夏燕
灸花水兵さんの記章めく
夏吟みんなで同じカレー食ぶ
梔子の香に触れてより口重し
青田原潜望鏡めく鷺の首

蓋なきもの

甲州千草

辣蕪剥き了へて生き生きする灯
波状なるプラザの屋根や男梅雨

梅雨明の匂ひまつはる竹箒
蟬の穴過去を蓋なきものとして
夜通しの風を余らす葛の蔓
学生の名刺の余白夏休

梶子月夜

杉本光祥

われ喜寿の祝のビール一気飲み
這ひ昇るいちづな勢ひゴーヤ蔓
首立てて世を窺へり蝮蛇草
雨の日の一服もよし夏点前
レイソルよがんばれ紫陽花盛り上る
雨上り梶子月夜となりにけり

最初の一顆

藤原照子

補聴器の竹皮を脱ぐ音捉ふ
スイッチバツク新緑の大うねり
青柿落つ最初の一顆たる勇氣
昭和へと話の逸れしソーダ水

海霧の航利尻礼文をひと跨ぎ
海猫千羽翔ちては戻り岬の原

葉の遊び

吉田政江

青茅の輪雨雫ごとくぐりけり
蛇泳ぐ水面へ一分身を浮かせ
青蔦や登りつめたる葉の遊び
房総の潮目に育ち磯飽
出目金と目が合ひはつと後退り
凌霄の狼籍ハンドル取られさう

乱反射

久染康子

関東大会

万緑叢中骨格太き支部揃ふ
瀧こだま四方の峰々に乱反射
地震過ぎてもやんと暑くなりけり
珍しく電話来ぬ日や夕かなかな
ひそひそと下葉隠れの枇杷育つ
青すすき靡く事など未だ知らず

長崎忌 広渡敬雄

蟻落ちて油のやうな水の面
茶漬に梅干地球儀に青き海
ひんやりと力石あり宵祭
滴りのわが脈拍となりゆけり
夕顔ややはらく割く烏賊の腸
押花の緑うつすら長崎忌

山青きとき 林昭太郎

ころもがへ山青きとき海蒼く
年寄りのとしよりぎらひ麦こがし
漆黒の翅を放ちぬ木下闇
計るたび縮む身長・雲の峰
天井のしばらく遠し昼寢覚
心太烟る眼下に壇ノ浦

伝言ゲーム 内山照久

長々と伝言ゲーム蟻の列
豆飯の一粒ごとの笑顔かな

泰山木雨を弾きて一花あぐ
箱庭の空は共有してゐたり
闇に見る乱調の美や蛩狩
梅雨晴間庭いつぱいにシーツの帆
軽ワゴン 小松誠一

降り続く水輪を掃きて通し鴨
沈黙は抗議のあかし梅雨の星
対岸の湯宿の灯り河鹿笛
尾を切りて遁るる蜥蜴現世にも
5回目で沈む水切り炎天下
日盛や登坂車線の軽ワゴン
疲れ鶉 鈴木良戈

採血の順番待ちや梅雨深む
緊張や幾度汗の眼鏡拭く
疲れ鶉の眼つぶりしまま佇立せる
杭の鶉や視線鋭く見返せる
白南風や閨高々と船通す
子供等の石蹴つて行く桜桃忌

潮鳴集



草書

荒井千瑛子

楷書より草書の暮し梅雨に入る
際立つも朽ちゆくも白梅雨の森
我が影を追ひて急ぎぬ日の盛り
戻らざる人のいくたり木下闇
原色の親子の時間捕虫網

缶コーヒー

神山節子

長々と貨車軋みゆく走り梅雨
あぢさゐにとり残されて母の居り
頭から足の先まで滝の音
緑蔭の黙に差し出す缶コーヒー
水音に春蟬低く低く鳴く

あめんぼう

菊川俊朗

短夜や弔辞の稿を枕辺に
七月の声を揃へて地引網
美しき脚よ遠見のあめんぼう
我を呼ぶ声か夏帽消えし空
土用波父性と云ふは折れ易く

野の花

平松うさぎ

角ありて角のやさしき水羊羹
星祭る星に探查機送りつつ
湖の鍵めく一船夏の暁
身を守る棘の勝ちぬて夏薊
野の花の一つ一つに涼しき名

沖作品



能村研三 選

千葉

岡 真紗子

蜘蛛の囀のダイヤ繋ぎに光りけり
肯定か否定か風の七変化
緑蔭とふオアシスの中バスを待つ
講堂に楽唳唳と巴里祭
梅雨咲きの花を尋ねて彷徨す
滴りの風に抗ふ力あり
万緑や水の豊かな国に住み
眼の覚めるたびに金魚を覗きけり
子の財にならぬ蔵書を曝しけり
軒下の人入れ替はる夕立かな
緑さす質問責めの元気な子
麦秋の中の踏切ふいに鳴る
恥ぢらひの色を纏うて新生姜
向ひ合ふ品良き刀自のサン格拉斯
追ふ風と追はるる風や青田原

塩野谷慎吾

竹内タカミ

市川市

小林 陽子

青あらし吹き抜け高き彫塑館
海鳴りを入れ夏至の夜の野外劇
涼風や鼻から歩き出す子象
火取虫一途に狂ふ時もあり
尺蠖の地球の尺を取らむとす
翡翠の鋭角に翔ぶ矜恃かな
さはされどこは辛抱青葉木菟
十葉やここを先途とめかしをり
河童忌や百科辞典は括られて
麻酔醒む力を入れて浮いて来い
洗ひ了へ旅の実梅の香りたつ
染め上げの浴衣地干せり青葉風
水にもらふ色あざやかに水中花
ダム放流掠め飛び交ふ夏燕
峡の宵夜鷹の利声闇をよぶ

千葉

山本 明彦

棚橋 朗

沖作品 15句選評

*
能村研三

蜘蛛の罫のダイヤ繫ぎに光りけり 岡 真紗子

この句、関東大会で柏の葉公園に吟行した時に作られたのであろう。この日は生憎の梅雨空で傘をさしての吟行となった。吟行の即吟というのは、当然のことながら当日の天候などその日に与えられた条件の中で句材を探し詠み競うものである。この光景はたまたま私も目にして、句帖に記したが句が出来るまでに至らなかった。蜘蛛は糸を分泌して粘着力のある網を張り、網にかかった昆虫などを捕食するが、その形はきわめて巧緻であり、まるで芸術作品を見ているようである。特に雨の降ったあとなど、露のついた葉は光に輝き美しい。これを「ダイヤ繫ぎ」とすばらしい言葉で表現した。

滴りの風に抗ふ力あり 塩野合慎吾

崖や岩、苔などを伝わってしたり落ちる水滴のことを滴りと言うが、雨によるものではなく、地表から滲み出た水で、夏場にはいかにも涼しげである。最初は僅かであっても、これが

集まってせせらぎとなり、やがて大河になり海へと注ぐ。滴りがやがて大きな水の集まりとなって、大きな力を発揮することを作者は充分熟知している。それが故に滴りにある性根の力というものを読み取ることができた。どんなに風に吹かれようとそれに抗う力は備えているのだ。

恥ちらひの色を纏うて新生姜 竹内タカミ

新生姜の季語は夏に分類されている歳時記もあるようだが、角川の合本俳句歳時記では秋の項に入っている。シヨウガ科の多年草。秋、淡黄色で多肉の根茎が大きくなったものを収穫するが、新生姜は八月ころに掘った若い根を食用とする。香りが高く辛味も強い。焼き魚などのあしらいとして添えられる甘酢漬の葉生姜を「はじかみ」というが、これは茎の端が赤いのが転じて「端赤み」になったという説があるように、まさに恥じらいの色を纏っているようでもある。

海鳴りを入れ夏至の夜の野外劇 小林 陽子

エキゾチックな雰囲気のある句である。夏至は日本でも二十四節季の一つではあるが、そんなに重要な扱いをされていない。しかしヨーロッパでは、一年で一番短い夜と一番長い昼を満喫できることから、花輪をかぶってお祝ひしたりもする。この句を詠んだのがヨーロッパかどうかはわからないが、海の近くで海鳴りが聞こえるような場所での野外劇だから、さぞかしすばらしかったに違いない。〈以下略〉